

P1-058

小児1型糖尿病サマーキャンプにおける
当科の取り組みおよび口腔内状況について太刀掛 銘子¹、光畑 智恵子²、新里 法子²、
香西 克之²¹広島大学病院 小児歯科、²広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 小児歯科学

【目的】

糖尿病は歯周疾患のリスクファクターであり、1型糖尿病患者においても健常者に比べ歯周疾患罹患率が有意に高いことが明らかになっている。我々は、1990年から行われている広島「もみじの会」が主催する小児1型糖尿病サマーキャンプに2005年から現在まで継続して参加し、歯科検診（糖尿病と歯周病の講義、う蝕や歯周検査などの口腔内診査、歯科衛生士によるブラッシング指導）を行ってきた。しかし、歯科医師が参加しているキャンプは全国で少なく、歯科介入の必要性を医療スタッフに啓発していく必要があると考え、今回サマーキャンプにおける当科の取り組みおよび1型糖尿病患者の口腔内状況について報告する。

【対象と方法】

対象は2005年から2015年までの11年間に広島「もみじの会」小児1型糖尿病キャンプに参加した402名のうちの7歳から14歳までの83名（男児37名、女児46名、平均年齢10.0±2.3歳、複数回参加者は初回参加時を診査の対象）とした。比較対象として、広島大学病院小児歯科を受診した7歳から14歳の168名の非糖尿病の小児および平成23年歯科疾患実態調査報告書を使用した。診査はう蝕の診査、歯周疾患の診査および滅菌歯ブラシでブラッシングにて採取したプラークよりDNAを抽出し、歯周病原性細菌である *Aggregatibacter actinomycetemcomitans* (A.a), *Prophyromonas gingivalis* (Pg), *Prevotella intermedia* (Pi), *Treponema denticola* (T.d), *Tannerella forsythia* (T.f) の検出をPCR法にて行った。

【結果】

1) う蝕：1型糖尿病患者における乳歯の一人平均う蝕経験歯数 (dft) は全国調査（平成23年歯科疾患実態調査報告書）と比べると7～9歳では低く、10～14歳では高い値を示した。2) 歯周疾患：1型糖尿病患者における歯周疾患罹患率の割合は92.8%で、全国調査の5～9歳35.5%、10～14歳54.7%と比較して有意に高い値を示した。また、HbA1c値が増加すると歯肉の炎症部位数が増加する傾向が認められた。3) 歯周病原性細菌の検出率：歯周疾患に罹患している1型糖尿病患者は、歯周疾患に罹患している非糖尿病の小児と比べるとT.d菌以外の菌において検出率が有意に高かった。

【考察】

1型糖尿病患者は、小児期から歯周疾患に高率で罹患し、歯周病原性細菌の検出も認め、歯周疾患のリスクが高いことが示唆されたことより、小児期からの定期的な歯科のアプローチの実施が重要であり、そのためにも医歯連携の強化が望まれる。